９　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　　　〈静岡大〉二〇二一年度出題

　と花をつけた桜並木の下を自転車で走っていく。つがいのは川面を（ア）スベるように進み、がに舞い降りる。去年と変わらない春の光景。ただ違うのは、土手にシートを広げて憩う花見客の姿がないことだ。花や鳥たちにとっては変わらぬ春。人にとっては（イ）フオンな春。どこまでも続く花の下を走り抜けながら、それぞれの生物が生きている環世界の違いをあらためて思う。同じ時空間を共有していながら、んでいる世界は異なっている。

　でもいま、私たちが恐れているのは異なる環世界の間を往き来するものだ。動物から人へ、人から人へ。生物の間を往き来し、感染し、影響を及ぼすもの。

　かつてレヴィ＝ストロースは狂牛病（牛海綿状脳症：ＢＳＥ）について、人間が作りだしたの帰結として論じた。ウシの死骸の一部を飼料に混ぜて（ウ）カチクに食べさせたことがこの病のを招き、病んだウシの肉を食べることで人間も死の危険にされる。彼が指摘したのは、ウシがウシを食うことだけではなく、人がウシを食べることもまた、動物同士の共食いという一種のカニバリズムにほかならないということだった。そこには「食べる」という抜き差しならない関係を通して他の存在とつながりあい、相手の一部を自己の中にり入れ、それによって危機的な影響を被ってしまうという、つながりと同化の負の側面が示されている。

　だが、あえてカニバリズムというまでもなく、私たちは常にそうした危うさをはらんだ自他のつながりと融合を生きているのかもしれない。無数の物質を摂りこむことで「私」が形成されると同時に、「私」から出ていく物質には私の一部が含まれている。そのようにして、私は無数の他からなるとともに、無数の他の中に拡散している。①自己でもあり他でもあるは、そうしていくつもの環世界の間をめぐり流れる。

　食べること、触れあうこと、世話すること、分かちあうこと。そうした日常的な行為を通して、私と人間ならざるものを含む他者たちの断片は延々と受け渡しされ、摂取され、放出され、拡散し、循環していく。

　南アジアの村で、あるいはメラネシアの島で、人類学者たちはそうした相互浸透的で拡散的な「人」のありように出会ってきた。水や食物、血液や母乳、供物や贈り物。それらの内に含まれ、やりとりを通して人びとの間を受け渡されていくものを、人類学者は「サブスタンス＝コード」と呼んだ。それは物質としてのサブスタンスと、人のありようを方向づけ、自己と他者、人間と自然の関係を秩序づけるとの一体性をあらわす概念である。人類学的な議論において、このように他者のサブスタンス＝コードを摂りこむことで生成するとともに変容し、自己の一部を放出することでつながりの中に拡散してゆくような人のあり方は、明確な境界をもち、それ以上分けられない存在としての「個人（individual）」と対比されるべき「分人（dividual person）」と呼ばれ、一部の非西洋社会における独特な人間像を表すものとされてきた。

　ところで、生物学者の中屋敷均によれば、ウイルスなるものは一般に、キャプシドというタンパク質の集合体が、固有の遺伝情報からなる核酸を包みこむという基本構造をもつという。中屋敷はまた、親から子へという鉛直方向における遺伝子の伝達とは異なり、同時代に存在する他種の生物の間で遺伝子がやりとりされるという、遺伝子の「水平移行」を媒介するウイルスの働きについて述べている。たとえば、ある宿主の遺伝子をウイルスが運び出して別の宿主に感染することで、前者の遺伝情報が後者に移行することがありうる。

　コード化された情報を内包し、宿主の間を水平方向に移動していく物質。②とすればウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンス＝コード」だといえるかもしれない。

　ただしもちろん、それは人類学者によって長らく議論されてきたサブスタンス＝コードと同じではない。人類学的な議論において、「コード」という語は符号化された情報というよりも人としての規を意味しており、ゆえに人類学的なサブスタンス＝コードの概念には、社会関係や価値観やモラルなどが含意されている。他方で、ウイルスに含まれるコードは本来的に、社会的なものでも倫理的なものでもない。

　その一方で、ウイルスを含む生物学的なサブスタンス＝コードの流通は、社会化されることがありうる。たとえば、あるウイルスの感染経路をたどろうとするとき、それはウイルスがしていく宿主と宿主の関係性をたどり、明らかにしていくことにほかならない。そのつながりは次々に枝分かれし、伸展し、拡散していく。このとき、宿主である「私」の微小な断片が接触を通して社会関係の網の目の中に分散していくとともに、無数の他者たちの断片が知らぬ間に「私」の中に混入していることが、想像でも比喩でもなく、端的な事実として知らしめられる。

　そうして気づかされるのは、透過的で拡散的な「分人」としての人が、遠い異文化に生きる人びとの想像の産物であるのではなく、確固たる境界をもち、これ以上分けることができない存在としての「個人」こそが、たぶん幻想なのだということだ。

　サブスタンス＝コードや「分人」などの概念を提唱した人類学者たちは、南アジア社会において、危険をはらんだ「他者」との接触や物のやりとりがもたらすかもしれない影響から自分の身を守るために、人びとが編みだした規範やふるまいの例を報告している。

　相手と触れあわない、共食しない、同じ食器を使わない。あるいはまた、相手と適切な距離をとり、互いの間に一時的な境界を引く。

　他者との接触は潜在的な畏れをはらみ、接触にともなうサブスタンス＝コードのやりとりには常に危険が潜んでいる。そして、そうした危険を回避するためにつながりを断ち切ろうとする方法は、いつもどこか似通っている。

　遺伝情報からなる核酸を包みこんだタンパク質の集合体。そんな生物学的なサブスタンス＝コードは本来的に、人間的なものでも社会的なものでもない。だが、それが社会関係を通して伝播し、拡散し、それを受け渡しする人びとの生に重大な影響を及ぼすとき、人類学者の見出したサブスタンス＝コードの場合と同じく、その流通を制御し、やりとりをコントロールするための方法が編みだされる。

　ただし今や、そのために用いられるのは洗練されたテクノロジーだ。スマートフォンの位置情報や検索（エ）リレキの統計データを用いたクラスター発生エリアの推定、携帯電話やＩＣカードのデータを用いた感染者の移動経路の特定、スマートフォンのアプリを用いた利用者同士の接触の記録と感染者との接触の通知。

　これらのことを可能にしているのは、普段はさほど意識されることもないスマートで便利な情報ネットワークだ。ウイルスという生物学的なサブスタンス＝コードの流通を把握し、制御するためにインフラ化した情報のネットワークが用いられ、それを補完するために新たな技術が開発されていく。人びとの移動経路が追跡され、互いの接触が記録され、感染の軌跡が可視化される。そうやって部分的にせよわにされるのは、皮肉にも「個人情報」という名で呼ばれる私たちの痕跡、私たちの断片、私たちのつながりと混交と拡散のありさまである。

　たぶんindividualなど、③これまでに一度も存在したことはなかったのだ。

　だが、人間によるそうした把握や制御の試みをよそに、ウイルスは人と人の間を、異なる環世界に生きる生物たちの間をめぐり流れる。そのことが可能であるのは、まずもって異なる存在である〈私―たち〉の間に、少なくとも授受の関係が成り立つような共通項があるからだ。くわえて、ウイルスの（オ）ジンソクな流通と広範な拡散を可能としているのは、人間の作りだした社会的ネットワークの存在にほかならない。

　だからこそいま、人間性や社会性とは本来的に無関係なサブスタンス＝コードとして、異なる存在の間をめぐり流れるウイルスの流通を見つめる視座と、そうした流通がどのようなネットワークによって媒介されており、それに対処するためにいかなる社会的・政治的な方法が編みだされ、テクノロジーとして実装され、普及することで社会の常態を変えていくのかを注視する視座の両方が必要であると思われる。生物学的なサブスタンス＝コードの流通と、社会的かつ政治的なネットワークのもつれあいを見定めるために。

　レヴィ＝ストロースの論考に戻ろう。狂牛病の蔓延を、人為的に作りだされたカニバリズムの破滅的な帰結とみる彼の指摘によって気づかされることは、この病は「ウシがウシを食べ、その肉を人間が食べる」という、自然状態ではありえない食物連鎖によって生じたサブスタンス＝コードの思いがけない伝播と混交の結果であるということだ。従来、そうした危険な混交を避け、サブスタンス＝コードの流通を制御する装置のひとつが、禁忌と呼ばれるものであった。自然のとみえるまでに根源的な禁忌が破られたとき、危険をはらんだサブスタンス＝コードは制御を超えて氾濫し、それを摂取した者を死に至らしめる。

　南アジアの各地で調査を行なった人類学者たちは、サブスタンス＝コードのやりとりを通して他者と混じりあい、浸透しあうことの危険性に、人びとが非常な注意を払っていることに注目していた。それぞれの社会において、他者との接触や物のやりとりは注意深く秩序化されてきたが、それは人間同士の関係性のみならず、精霊や動物といった人間ならざる存在との関係についても当てはまる。

　たとえば私の調査地である南インドの村で、人びとがやりとりに際してもっとも気を遣っていた相手は、トラやヘビといった野生動物の霊を含む神霊たちであった。神霊のもつ野生の力は人間にとって危険であると同時に、土地や村の再生産を可能にする性に満ちている。それは人びとを生かしもし、殺しもする。だから村人たちは儀礼の中で、にした神霊に供物を捧げてその力をし、力の一部を受け取ったのちに、ふたたび野生の領域に送り返す。同様に、村ではマーリと呼ばれる天然痘の女神もまた、の対象となっていた。村人たちは女神に供犠を捧げ、その恐るべき力を慰撫し、鎮めようとする。

　危険な「他者」に対する忌避や禁忌は、だから本来、単なる排除ではなく、相手の両義的な力を制御しつつ受け取るための方法のひとつであった。水田に引き入れる水の量を調整するように、そうした儀礼は危険で豊饒な力の流通を調整し、人間と野生との境界を引き直す作業である。それは自他の根本的な差異に基づく絶対的な境界ではなく、むしろ、④ふと気を許せば互いが混ざりあってしまうことを前提としたな境界であり、だからこそ人びとは日々相手との関係を気遣い、禁忌に従い、互いの差異を生みだしつづける。

（石井美保「センザンコウの警告」による）

問１　傍線部（ア）～（オ）のカタカナの部分を漢字に改めよ（解答は楷書ではっきりと書くこと）。

問２　傍線部①「自己でもあり他でもある」と同じ内容の箇所を、本文中より二〇字以内で抜き出せ。

問３　傍線部②「とすればウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンス＝コード」だといえるかもしれない」とあるが、筆者はウイルスを「サブスタンス＝コード」といえると考えているのか。筆者の考えを説明せよ。

問４　傍線部③「これまでに一度も存在したことはなかった」と同じ意味で用いられている単語を本文中より抜き出せ。

問５　筆者は「分人」をどのような概念だと考えているか。本文中の語句を用いて説明せよ。

問６　筆者は、「禁忌」をどのような役割をもつものと考えているか。本文中の語句を用いて説明せよ。

◎問７　傍線部④「ふと気を許せば互いが混ざりあってしまうことを前提とした脆弱な境界」とあるが、自他の脆弱な境界について、身近な例をあげながら二〇〇字以内であなたの考えを述べよ。

【解答と採点基準】

問１　（ア）＝滑（る）　　（イ）＝不穏　　（ウ）＝家畜　　（エ）＝履歴　　（オ）＝迅速

問２　私と人間ならざるものを含む他者たちの断片（20字）

問３　Ａウイルス自身は社会的・倫理的なものではないので、Ｂ従来の人類学的な議論には当てはまらないが、Ｃある宿主の遺伝情報を内包し、感染により別の宿主に移行することで、Ｄその流通が社会化され得るという点では、Ｅ「サブスタンス・コード」といえると考えている。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２

「ウイルスは…『サブスタンス＝コード』といえる」という形式で答えること。

問４　幻想

問５　Ａ他者の一部を摂りこむことで生成するとともに変容し、Ｂ自己の一部を放出することでつながりの中に拡散してゆくような、Ｃ明確な境界をもたない人のあり方。

Ａ＝４〔『サブスタンス＝コード』を換言していなければ減点２。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝４

問６　Ａサブスタンス＝コードのやりとりを通して Ｂ他者と混じりあい、浸透しあうことで生まれる Ｃ危険な混交を避けるために、そのＤ流通を制御し、時には相手の豊饒な力を受け取るためのもの。

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝３／Ｄ＝２

問７　友人と会話しながら食事をとるといったありふれた行為によっても自分と友人は互いに自己の断片である唾液などを取り込んでしまう。このようにみると自他の境界は脆弱で、特に現在流行している新型コロナウイルスなどを互いに取り込むと生命の危険のおそれさえある。そこで人類学の成果が提示するように、われわれの生活においても他者との適切な距離を取るといった「禁忌」を設け、自他の危険な混交を制御する努力が必要である。

（199字）

解説も参考にして、次の観点を踏まえているか確認すること。

・自他の境界が脆弱なことの身近な例について記述がある＝２

・自他の境界が脆弱なことの具体例が、傍線部を踏まえている＝２

・自他の混交の危険性について具体的な記述がある＝２

・禁忌についての具体的な記述がある＝２

・禁忌の役割についての記述がある＝２